J. S. バッハ(1685-1750)：無伴奏チェロ組曲 第1番 ト長調　BWV1007

バッハがケーテン宮廷楽団の楽長を務めていた時代の後期にあたる1720年頃作曲された6曲の＜無伴奏チェロ組曲＞は、ほぼ同時期に書かれた＜無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ＞と並んで、バッハの無伴奏器楽曲の傑作として知られている。バッハの時代、チェロという楽器はまだ独奏楽器としての役割をほとんど与えられていなかったが、この作品によって、この大型の弦楽器の朗々とした音色の魅力と演奏技術の可能性が、音楽史上はじめて開拓されることとなった。この画期的な作品は、ケーテン宮廷楽団の名手、F.C.アーベルのために書かれたものといわれている。アーベルの高度な演奏技術があってこそ、バッハはこの傑作を生み出すことが出来たのであるが、この作品がテクニックの向上著しい現代においてもなお、チェリストの演奏技術とその音楽表現のいわば試金石として厳然と立ちはだかる存在であるのは、バッハの音楽の偉大さゆえに他ならない。ここに書かれているのは、「無伴奏」の旋律楽器一本のみによって、ポリフォニーや和声などのあらゆる要素が完璧なまでに実現された音楽なのである。

6曲の組曲はすべて、基本的に同じ構成で作られている。すなわちドイツで伝統的に用いられてきた4つの舞曲、アルマンド、クーラント、サラバンド、ジーグをこの順序で並べ、サラバンドとジーグの間に長調と短調2曲を一対とした任意の舞曲（メヌエットやブレーやガヴォット）を挿入し、組曲全体の冒頭に前奏曲を置くという6曲構成である。アルマンドは「ドイツ風の舞曲」で4/4拍子、中庸の速さで奏される。クーラントはフランスの古い舞踏曲で2/4拍子、溌剌とした曲調をもつ。サラバンドは17世紀スペインで起こった3/4拍子（または3/2拍子）の、きわめて緩やかで荘重な舞曲。ジーグは古くイギリスに起こった民衆の踊りで、きわめて迅速、活発な舞曲である。

チェロという楽器は、大型であるがゆえにヴァイオリンなどと比べると技術的制約が大きい。特にバッハが意図した音楽は、和声的な書法やポリフォニックな書法がその根底にあるため、その制約の影響が顕著にあらわれる。そこでバッハは、この＜第1番＞ではト長調というチェロに適した調性を採用し、楽器の性能を余すところなく発揮させる事に成功したのだった。

第1曲「前奏曲」、第2曲「アルマンド」、第3曲「クーラント」、第4曲「サラバンド」、第5曲「メヌエットⅠ、Ⅱ」、第6曲「ジーグ」。

G.クラム(1929 -)：無伴奏チェロ・ソナタ

ジョージ・クラムはアメリカの現代作曲家で、ユニークな楽器の組み合わせによる音色の追求や、演奏家の「パフォーマンス」の可能性に関心を寄せた試みなど、様々な実験的作風で知られている。弦楽四重奏のための「黒い悪魔たち」やピアノ曲集「マクロコスモス」などが代表作で、大規模なオーケストラを用いた作品よりは、楽器の特性を生かした作品に持ち味を発揮する作曲家だ。＜無伴奏チェロ・ソナタ＞は1955年に作曲された初期の作品ながら、バルトークを想わせる旋律と高度な技巧を盛り込んだ現代チェロの定番曲として、多くのチェリストのレパートリーとなっている。

第1楽章「幻想曲」、第2楽章「牧歌的主題と変奏」、第3楽章「トッカータ」。

黛 敏郎(1929-1997)：無伴奏チェロのための “BUNRAKU”

戦後日本の作曲界をリードする存在として、幅広いジャンルに数々の傑作、意欲作を残した黛敏郎の代表的独奏曲として知られるこの＜BUNRAKU＞は、文楽の太棹三味線の音楽的特徴を西欧楽器チェロに取り入れることによって、その表現効果を拡大しようと試みた作品。黛は、代表作＜涅槃（ねはん）交響曲＞に象徴されるように、日本の伝統的要素の西欧の音楽媒体による再構築を、創作の一つの柱とした作曲家だった。曲は、多彩なピッツィカート奏法を駆使し、さらに義太夫の語りのフレーズを模した部分などを交えながら、ダイナミックに高潮していく。

J. S. バッハ(1685-1750)：無伴奏チェロ組曲 第4番 変ホ長調　BWV1010

前述の＜第1番＞と同様に、前奏曲と5つの舞曲で構成されるこの＜第4番＞は、明朗な楽想の中に急激なパッセージが挿まれるなど、対比の妙が豊かに盛り込まれた作品となっている。玄妙なサラバンド以外は、リズミカルで朗らかな印象を与える曲が並ぶ。

第1曲「前奏曲」、第2曲「アルマンド」、第3曲「クーラント」、第4曲「サラバンド」、第5曲「ブレーⅠ、Ⅱ」、第6曲「ジーグ」。聴きどころの一つは「前奏曲」。幅広い音域にわたるアルペッジョで悠々と始まり、やがて激しい動きをともなって劇的な高まりが形作られる。

G.リゲティ(1923-2006)：無伴奏チェロ・ソナタ

20世紀の現代音楽界における最大の作曲家と称えられたジェルジュ・リゲティは、ハンガリーに生まれ、33歳までは母国で作曲を教えるなどして活動したが、1956年のハンガリー動乱を機に亡命、以後ドイツを中心に創作活動を展開した。独自の作曲理論に裏付けられたその画期的作品は、同時代の作曲家たちに多大な影響を与えた。中でも「ミクロポリフォニー」と呼ばれる微細な声部を積み重ねた書法による＜アトモスフェール＞や＜ロンターノ＞といったオーケストラ作品や、1985年以降の晩年に書き続けられた＜ピアノのための練習曲集＞などは、彼の複雑・精緻な作曲法が縦横に発揮された傑作として名高い。今回演奏される＜無伴奏チェロ・ソナタ＞は、バルトークの影響を受けていた若き日の作品。ハンガリー時代、リゲティの作品は政治的理由で出版も演奏もできなかったというが、1948/53年に作曲されたこの作品も、長い間埋もれていたものである（初演は1983年）。曲は2つの楽章からなる。

第1楽章はDialogo（対話）と題され、リゲティが恋心を抱いていた女性のために書いたという情感豊かな曲。

第2楽章Capriccio（奇想曲）は、第1楽章とは対照的にきわめて技巧的に書かれている。